

語 源 再 考

— 辞典等に見る語源説明をめぐって —

(3)

河 野 庸 二

はじめに

情報化時代といわれる今日においても、海外事情というものは必ずしもよく伝わってくるわけではない。自国に住む者にとっては自明のことがらでもそれが情報の材料になりにくいがかえって国外に伝わらないという場合もある。海外に関する情報をもっぱら書籍等に頼らざるを得ない外国文化の研究者にとって、知識の限界を感じさせられることは再三ある。それだけにかねてから求めていた情報にたまたまめぐり逢えたときのよるこびはひとしおである。今回はアメリカの俗語もしくはそれに類するものを二三扱っている。いずれも語源自体には何ら異説があるわけではないが、解説書によって重点の置きどころが異なるために、併せ読むことによってより詳細かつ正確な知識をめざそうとするものである。

many-splendored

イギリスの言語学者 E. Partridge はその著書 *A Dictionary of Catch Phrase* の Introduction の中で catch phrase の定義づけのむずかしさを説きながら次のように記している。

Consult the standard dictionaries, the best and greatest: you will notice that they tacitly admit the impossibility of precise definition.¹

パートリッジの指摘するとおり、英和辞典においても、「(人の注意を引く) 奇抜な文句、警句、キャッチフレーズ」; 「人の注意を引く文句、うたい文句、キャッチフレーズ; 常套語句」などと、的確な定義づけをめざす努力がなされてはいるものの、これらとて決して明快な説明とは言いがたいので

はないか。ちなみに、わが国でいう「キャッチフレーズ」は、国語辞典の「人の注意を引くように工夫した印象的な宣伝文句」；「簡単な表現で、人の注意をひく宣伝の文句・うたい文句」や外来語辞典の、「うたい文句、人の感覚に訴え、注意をひきつけるように工夫された簡潔で効果的な宣伝文句」などの定義づけからも明らかなように、かなり特殊化された狭い意味で用いられている。結局 catch phrase の定義としては、*The American Heritage Dictionary (New College Edition)* の catchword の項にある An often repeated word or slogan. Also called “catch phrase.” あたりが簡潔で要を得ていると思うが、「キャッチフレーズ辞典」の著者は次のような定義づけを試みている。

A pen-friend, who has, for thirty years or more, copiously contributed both slang terms, on the one hand, and catch phrases (not, of course, necessarily slangy) on the other, tells me that the best definition he has seen is this: a catch phrase is a phrase that has caught on, and pleases the populace.' I'll go along with that, provided these substitutions be accepted: 'saying' for 'phrase'; and 'public' for the tendentious 'populace'.¹

パートリッジのいうように「人気を博し、一般の人たちの気に入られる言葉」が catch phrase であるとすれば、'many-splendored' という語などはまさにそう呼ばれるにふさわしい、文字どおり人口に膾炙する語であるかに思われるのだが、実際にはこの語を載せている辞書は皆無に近い。既述のパートリッジの辞典にも出ていないのである。そういう実状がある中でひとり Morris 夫妻の語源辞典だけが **many-splendored thing** の項を設けているのが注目される。

Love Is a Many-splendored Thing was the name of a film and the film was based upon an earlier novel. But the novel took its title from a poem by Francis Thompson, first published in 1913. Titled “The Kingdom of God,” it has a verse that ran: “The angels keep their ancient places:/ Turn but a stone and start a wing!/'Tis ye, 'tis your estranged faces,/ That miss the *many-splendoured thing*.” Note that Thompson, being British, spelled it “splendoured.”²

単語としての *many-splendored* は、ふつう不可算名詞として用いられる *splendo(u)r* をあえて可算名詞として使ったイギリスの詩人 Francis Thompson (1859~1907) の造語ということになる。そしてこの語を一躍世に広めたのはそれをタイトルに使った小説であり、その映画化作品というわけであるが、その際大きく寄与したのは映画そのものよりもむしろその主題歌の方だったかもしれない。名旋律として大ヒットし、さほど内容のないこの映画をこれほどまでに盛り上げた主題曲の歌詞も *Love is a many-splendored thing.* ではじまっているのである。さきごろ亡くなったアメリカの映画スター、ウィリアム・ホールデンの追悼番組として、たまたまこの映画(邦題「慕情」)が音声多重で放映されたものを録画する機会に恵まれたので、ビデオを通して確認できた事実によってモリス夫妻の辞書の補足を試みる。

映画の冒頭、William Holden Jennifer Jones in *Love Is a Many-splendored Thing* という主演者ならびにタイトルの紹介があった直後に *based on A Many-splendored Thing by Han Suyin* という文字が出るので、原作である小説のタイトルと作者名とが明らかになる。映画は1949~50年の香港を舞台に描かれるメロドラマで、病院に勤務する英中混血の女医ハン・スーインとアメリカの新聞記者マーク・エリオットとの悲恋物語である。ヒロインの名前から察せられるように、原作はおそらく *autobiographical* なのであろう。製作年度は1955年、初期のシネマスコープ作品である。折から勃発した朝鮮動乱に従軍して、男は命を落とすことになるのだが、つかの間の幸福とはつゆ知らず、主役の2人がマカオのホテルでおち合って恋のよろこびに酔いしれるシーンは、2人の運命を暗示するダイアログも含まれるまさにこの映画のクライマックスであると同時に、対話を通してタイトルの出典が明らかにされるといっても重要な場面となっている。次にビデオからの原語版、日本語版の再録を試みる。

Suyin: Oh, pity the poor people with their sad faces who missed our weal!

Mark: You know, I was thinking last night of them, lines in Thompson's poem. "'Tis ye, 'tis your estranged faces,/ That miss the many-splendored thing."

Suyin: I'm so happy it frightens me. I have a feeling that happiness or fairness is preparing for you and for me a great sadness because we have been given so much.

Mark: Darling, whatever happens, always remember: nothing is fair nor unfair under heaven.

スーイン: ああ、恋を失ってかなしそうな顔をした人たちがほんとうにかわいそうだわ。

マーク: トンプソンの詩の最後の行に一ゆうべ思い出していたんだ。「この世で一番すばらしいものを失うのは、お前だ、お前の冷たい顔だ。」

スーイン: あまり幸せすぎて心配だわ。神さまがしっとして、きっと私たちに大きなかなしみをお与えになるような気がするの。あんまり幸せを与えすぎたから。

マーク: スーイン、どんなことがあっても忘れちゃいけない。神はけっしていじわるなことはなさないんだ。

文法的に見れば many-splendored は、ふつうの英語辞典にある many-sided (多面的な), many-valued (多価の) などと何ら異なるところのない「形容詞-名詞+ed」型の複合語にすぎないのであるが、たまたま splendor のような文字どおり輝かしい単語と結びついたために、もう一方の造語要素である many までが positive な意味合いを帯びるに至っていると言えないであろうか。それでこそ「この世で一番すばらしい」という訳語も成り立つと思うのである。筆者は1970年代の、いったん廃刊になる前の *Life* 誌上の広告面でもこの語を見た記憶がある。たしかに、いかにも広告にはうってつけの語だと思う。モリス夫妻がその辞書に載せているからにはこの語などはれっきとした catch phrase として一般の辞書に登場してもよいのではないか。なお、many- のついた形容詞が今日宣伝文等の中にさかんに用いられるようになったそもその発端も、この単語あたりではなかったろうか。例えばペーパー・バックのポケット版アメリカ俗語辞典の裏表紙に印刷された 'blurb' の一節にもこの単語からの影響が感じられないだろうか。

The highly colored, many-flavored words and expressions of every sector of our national life—...³

Dodgers

わが国のプロ野球の歴史をふりかえってみても、時代と共に大小さまざま

な変貌をとげながら今日の隆盛を見るに至っていることがわかる。まして近年は野球界の動きも一段と活発になってきて、球団が別の都市に転出したりオーナーが変わったりする程度の変動なら何年かに1度の割合で起こり得るのである。野球の本場アメリカにおいても事情はまったく同様であることはマスコミを通してさまざまな情報源からとぎれとぎれにわれわれの耳に達しているが、各種のエンサイクロペディアによってその辺の詳細を確認することができる。

From 1903~1952, big league baseball was caught in log jam, with two clubs each frozen in New York, Boston, Philadelphia, Chicago, and St. Louis, and single National League clubs in Brooklyn, Pittsburgh, and Cincinnati, and single American League clubs in Cleveland, Detroit, and Washington.⁴

Many teams moved to different cities after World War II.⁵

The location of major league franchises were stable for 50 years until 1953. Air travel enabled the major league to operate over a larger area; ...⁶

過去50年間にわたって、チーム数、フランチャイズの所在とも全く変動のなかったアメリカの大リーグが、第2次大戦後1950年代に入ってにわかになわただしい動きを見せはじめたというのであるが、その要因としていみじくも戦後における民間航空の発達を指摘しているのである。その後も幾多の変貌をとげながら現在アメリカのメジャー・リーグはナショナル・リーグ、アメリカン・リーグとも12球団から成り、両リーグともさらに6球団ずつに2分されているが、全24球団の中には当然比較的近年になって増設された新球団も含まれるわけで、中にはカナダに進出したものさえある。また古参球団の中にも他の都市に転出したり、チーム名を変更したりするものが少なくない。いずれにしてもチーム名にはそれぞれ由来があるはずであるが、概してその来歴を知らなくとも察しのつくものが多いようである。(例) Montreal Expos, New York Mets (=Metropolitans), Houston Astros, Washington Senators, Milwaukee Brewers. ところが Dodgers の場合は、チーム名の由来にまで言及しているエンサイクロペディアがないため、Morris の語源辞

書に出逢うまでは調べようがなかったのである。ちなみにこのドジャーズは1957年のシーズン直後にブルックリンからロサンゼルスへ本拠地を移している。

The most spectacular moves followed the close of the 1957 season, when two historic National League clubs, the New York Giants and Brooklyn Dodgers made hops to San Francisco and Los Angeles, respectively.⁵

モリスの辞書は **Dodgers** の項を設けておりその解説は明快そのものである。

Just how did the baseball team get the name *Dodgers* anyway? For the answer we have to turn back to the start of this century, when the chief means of transportation in the bustling borough of Brooklyn was the trolley car. So numerous were the trolleys, especially in the central area around Borough Hall, that all Brooklynites were labeled *trolley dodgers*. Later the label was shortened to *Dodgers* and applied to the ball team ...²

これに対して1981年新刊の John Ciardi の語源辞書にも同じく **Dodgers** の項が設けてあり、その主要部分は次のとおりである。

[In the late XIX, when Brooklyn was still an independent municipality, Brooklynites were commonly called *Trolley Dodgers* because of the unusually large number of horse-drawn trolley cars that clanged through its crowded streets before the extention of the Brooklyn-Manhattan Transit subway. The baseball team was first known by the full municipal nickname, later shortened to *Dodgers*...]⁷

モリス、チアルディ両者の記述はまさに大同小異で内容は完全に一致する。ただチアルディは簡潔な解説文の中に、当時の‘trolley car’は電車ではなく馬車であったこと、ブルックリンの交通渋滞はやがてブルックリン・マンハッタン横断地下鉄の開通によって解消した事実を盛り込んでいる点さすがは詩人というべきであろう。ともあれこんにちニューヨーク市の1区をなす

Brooklyn がまだ独立した borough (市につぐ地方自治体) であった19世紀の末、路面電車の前身に当たる鉄道馬車が幅湊していた街路を、馬車から身をかわしながら歩いていた住民についた trolley dodgers というあだ名から起こったというこの球団名は、いかにもアメリカ的なユーモアに富んでいると思う。大リーグ初の黒人選手ジャッキー・ロビンソンを擁したことで知られる名門ドジャーズが、時移ってロサンゼルスに転じた後も(その名が今や無意味になるのもかえりみず) 伝統の球団名に固執したのも無理はない。なおチアルディは、このチーム最初の球場の外野には線路が通っていて、外野手は馬車をよけながら守備についていたという作為の見えすいた俗説が存在したことを書き添えている。

Not—as fanciful persons have asserted— because a street car line ran through the outfield of the team’s first playing field, forcing outfielders to dodge a trolley when fielding a ball.⁷

問題はチアルディがこの項の前置きとして書いているやや難解な次の一節である。

The National League baseball team, once central to the mythology of Brooklyn and Miss Marianne Moore, which broke Miss Moore’s heart by moving to Los Angeles, where the earthquake is already coiled to swallow the team into the pit for its perfidy.⁷

アメリカ人にとっては何の抵抗もなくさらっと読んでわかる記述なのかもしれないが、マリアンヌ・ムーア女史がピューリッツァー賞を受賞したことのある詩人であることは調べてわかって、女史が熱烈なドジャーズファンらしいことは(アメリカ人にとっては周知の事実かもしれないが)、われわれにはチアルディの文章から推測するしかなく、また、‘the earthquake’ 云々に至っては、悲惨な事故があったという記述なのか、それともドジャーズが最下位(=pit)に落ちたと言おうとしているのか判然としない。少なくとも野球に関心のあるアメリカ人以外の者にとってはいささか不明瞭な一節となっている。海外事情に通暁できる限界はまさしくこのあたりではないかと思われる。

なお William Morris は *The American Heritage Dictionary* の主幹であるが、一方 John Ciardi の方は1916年生まれの詩人でダンテの「神曲」の

韻文訳によっても知られている。その名前からしてもおそらくイタリア系であろう。また彼は *The Random House Dictionary* のような権威のある辞書の contributor として Izaac Asimov などと共に名を連ねている。アジモフ同様博学多識の人であることが推察される。

blurb

blurb＝「(新刊書などのカバー(jacket)に刷り込む)誇大広告」という単語の現状を含めてのすべてについてはイギリスの Brian Foster (1920～77) の名著 *The Changing English Language* の中に言いつくされている感がある。

The vocabulary of British publishing has not been greatly affected by Americanisms, with the notable exception of the *blurb*; defined by the C.O.D. (*Concise Oxford Dictionary*) as a ‘Publisher’s eulogy of a book, printed on jacket or in advertisements elsewhere (orig. U.S. slang)’. Despite its comic sound, this term is now used quite solemnly as an indispensable item in the jargon of literary critics and the reading public in general. Sometimes it even appears in the blurbs themselves, and is indisputably America’s greatest gift to the language of the British book-trade, since *best-seller* may not be of specifically American origin. *Blurb* was deliberately coined by Gellet Burgess, as described in some detail by Menken in ‘Supplement One’ to *The American Language*.⁸

ところでこの語が coin されたいきさつについては既述の語源辞典、俗語辞典を含めて英米の辞書類よりも、わが国の英和辞典の方に詳しい説明が見られるのである。これらはおそらく Foster の文中にある Menken の調査の成果によっているものと思われる。

[米国ユーモア作家 F. Gelett Burgess (1866～1951) が1907年自著のジャケットに若い女の絵を描き, Miss *Blinda Blurb* と名づけたことから]⁹

【((1914))← *Miss Blinda Blurb* (米国のユーモア作家 Gelett Burgess

(1866-1951)が1907年自著のカバーに捨いたグラマー美人につけた名)】¹⁰

Frank Gelett Burgess については *The Columbia Encyclopedia* に次のように紹介されている。

... His ability as an illustrator led him into magazine work, and he was soon writing humorous articles and stories to accompany his illustrations. ...⁵

また、モリスとチアルディはそれぞれちがった角度からバージェスをとらえているので2人の記述を合わせればかなりの量の情報が得られることになる。

Originally *blurb* meant a statement of lavish praise quoted on the dustjacket of a book. More recently, it has come to mean any exaggerated advertising claim. The word was coined by the late great humorist Gelett Burgess, who also used “bromide” to describe a person addicted to the use of clichés. Burgess also created the Purple Cow (which see).²

Any brief laudatory excerpt from a letter or review, especially when reprinted on the jacket of a book. [Coined by Gelette Burgess (1866-1951), American humorist, illustrator of children’s books, and author of the once pandemic poem “The Purple Cow.” Perh. a portmanteau of *blurt* and *burble*. Burgess defined *blurb* as “to make a noise like a publisher.”]⁷

上に引用したとおり Ciardi は ‘blurb’ を、「ことによると ‘blurt’ (だしぬけに言う) と ‘burble’ (ぶつぶついうつぶやき) からの混成語か。」と言っているが、Partridge の俗語辞典 Supplement には、

‘I have always, subconsciously, related [it] to *blab* and *burble*.’¹¹

という寄稿者 Leechman のコメントを載せている。たしかに ‘blurt’ も ‘blab’ (べらべらしゃべる) もともに ‘bl-’ を語頭にもつ、いわば同系統の語であ

るから、かのルイス・キャロルと同様に、ユーモア作家であるバージェスが portmanteau 語として coin したと考えるのももっともなことである。

ただ一つ気になるのは、この語の誕生するきっかけとなった美人 Miss Blurb の絵の実物がはたして残っているかどうかという点である。ましてブック・カバーというものはいずれ捨て去られる運命にあるのだから。

soap opera (屋メロ)

soap opera の ‘opera’ が space opera (宇宙冒険番組〔映画〕), horse opera (テレビ・映画などの西部劇)における ‘opera’ すなわち「はでで非現実的な劇」の意味であることは「語源再考」(2)の「新辞書の改良点」の章でふれた。ところでかつての辞書には載らなかった soap opera も、こんにちでは中級以上の英和辞典であれば100%載せているし、そればかりかたいていの場合簡単な語源説明を併記している。前回とり上げた hot dog同様、語の由来に誰しも興味をそそられる語であるためだろう。ただし中辞典クラスの辞書では説明がどうしても簡略化されるため、力点の置き場所がまちまちになり、説明文に微妙な差が生じてくるのである。比較的早い時期に出版された研究社の「英和中辞典」(*New Collegiate*)の場合はもっとも簡潔である。

【米】軽い連続放送劇，ホーム（メロ）ドラマ（（以前しばしば石けん会社が提供した））.¹²

ところが小学館の「英和中辞典」(*Progressive*)では、

（米話）（ラジオ・テレビの主婦向け連続）メロドラマ（しばしば石けん会社がスポンサーであったことより）⁹

となって「主婦向け」である点が強調されているが、この辞書とほぼ同じ時期に出た岩波の「新英和辞典」では、

（（ロ））（主婦向けに昼間放送される）通俗的な連続ドラマ（しばしば石鹸会社がスポンサーになった）¹³

とさらに「昼間放送される」点が書き添えられると同時にメロドラマの「メ

ロ」を「通俗的な」とさしかえた。のちに詳説することになるが、思うに中辞典級の辞書の説明文としてはもっともそつのないすぐれたものになっている。ちなみに研究社の大英和 (*New English-Japanese Dictionary* (*Fifth Edition*)) のこの項には誤植あるいは careless mistake としか思えない個所が含まれている。

[石鹼会社がしばしば主婦向けに昼間連続のラジオまたはテレビ放送劇、提供したことから]¹⁰

という語源の説明文は何回読み返しても釈然としない、つじつまの合わないものになっている。「, 」の代わりに「を」を入れることで一応まともな日本語になるが、さらにせんさくすれば「しばしば」の位置にも問題があり、前に引用した中型辞典に比較していかにも明快さの欠ける感じである。

一方この言葉の発祥地であるアメリカの辞典はどうであろうか。 *The American Heritage Dictionary* (*New College Edition*) は、

A daytime radio or television drama, characterized by sentimentality. [So called because many of them were originally sponsored by soap companies]¹⁴

のように簡潔であるが、さらに大型の *The Random House Dictionary* はそのような番組の内容にまでかなり詳細にわたって言及している。

Informal. a serialized program presented on radio or television dramatizing the personal and domestic problems, successes, and failures of a fictional character, family, or group in a sentimental, melodramatic way. [so called from the fact that many such programs were sponsored by soap companies]¹⁵

さらに、 *The Pocket Dictionary of American Slang* からは別の面での詳しい知識が得られる。

A daily dramatic serial program broadcast by radio, usu. lasting fifteen minutes each day, concerning fictitious domestic crises and troubles and often characterized by little action and much senti-

ment. *Because such programs are often sponsored by manufacturers of soap.*³

わが国においてもかつてラジオの全盛時代毎日15分間ずつ放送される連続放送劇があった。ただし（少なくとも筆者の記憶する限りでは）純然たるホームドラマが多く、したがってそれらはいわば「家族向け」であり、当然放送時間帯も夕刻である場合が多かった。それにNHKだったからスポンサーなどあるわけはなかったのである。ところでこの「アメリカ俗語辞典」は同時にまた ‘often characterized by little action and much sentiment.’¹⁴の一節でこの種の放送劇が「オペラ」と呼ばれる所以をも暗示している。

要するにアメリカの soap opera は主婦向けの連続ドラマなるがゆえに放送される時間帯は主婦にとっていちばん暇な昼間でなくてはならないし、番組提供者も主婦目当ての石けん会社が圧倒的に多かったわけで、その辺の事情がテレビ時代のこんにち俗に言う「昼メロ」という言葉の生まれたいきさつと似かよっている点が注目される。現にわが国の民間テレビ局の番組に目を向けると、昼下りの時間帯には主婦向けのいわゆる「すれちがいドラマ」が入れ替わり立ち替わり放送されており、その中には実際に石けん会社（現代ではむしろ洗剤会社という方がふさわしい）提供のものも含まれているのである。

ところでイギリスの本である Brewer の *Dictionary of Phrase and Fable* に目を転じると平明なアメリカ文とは一目で区別のつくいかにもイギリス的な文体で次のように記している。

a disparaging term for a type of play, usually in episodic serial form, used by commercial radio and television in advertising soap and other commodities.¹⁶

文体はさておき、この記述の特色は soap opera が蔑称であるという指摘であろう。この際思い出されるのは三省堂の *Crown Reader* (旧版) の Book III に採られたリンドバーグ夫人, Anne Spencer Morrow Lindbergh の随筆 *Gift from the Sea* の一節である。*The Columbia Encyclopedia* によれば *Gift from the Sea* は1955年の出版で、夫との飛行の体験から書かれた本の一つである。高校の教科書に採られた部分は煩雑な現代生活から時には脱け出して孤独になることの必要性を説く内容であったが、その中で夫人は明ら

かに軽蔑を込めて ‘soap opera という言葉を使っていた。

We can do our house-work with soap-opera heroes at our side.
Even day-dreaming was more creative than this; ...

Morris の辞書の記述からは「ソープ・オペラ」にはどのような作品があったかということまでうかがい知られるのである。

soap opera goes back to the halcyon days of radio suspense serials, like *Mary Nobel*, *Backstage Wife*; *Young Widder Brown* and *Our Gal Sunday*. There was nothing of the traditional “opera” about these sentimental, sensation-packed cliff-hangers, of course, but they had one thing in common: Practically all of them were sponsored by soap-makers.²

今となってはこれらのドラマがどういう内容のものであったかはその題名から想像するしか方法がないが、いかにもそれらしい題名ばかりではないか。かつてわが国においても「君の名は」が女風呂をがら空きにしたといわれるように、ソープオペラはアメリカの主婦をラジオの前にくぎづけにしたのであろう。*World Book Encyclopedia* の radio の項には次のような一節がある。

During the daytime, millions of women listened to dramas that were called *soap operas* because soap manufacturers sponsored many of them.¹⁷

注

1. Eric Partridge, *A Dictionary of Catch Phrase*, (Routledge & Kegan Paul, 1979)
2. William and Mary Morris, *Morris Dictionary of Word and Phrase Origins*, (Harper & Row, 1980)
3. *The Pocket Dictionary of American Slang*, (Pocket Books, 1973)
4. *Encyclopedia Americana*, (Grolier, 1966)
5. *American Peoples Encyclopedia*, (Grolier, 1964)
6. *The Columbia Encyclopedia*, (Columbia University Press, 1963)
7. John Ciardi, *A Browser's Dictionary*, (Harper & Row, 1980)
8. Brian Foster, *The Changing English Language*, (Penguin Books)
9. 小学館英和中辞典, (小学館, 昭和55年)
10. *Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary*, (研究社, 1980年)
11. Eric Partridge, *A Dictionary of Slang and Unconventional English (Vol. II: The Supplement)*, (Routledge & Kegan Paul, 1970)
12. 研究社英和中辞典, (研究社, 昭和50年)
13. 岩波新英和辞典, (岩波書店, 昭和80年)
14. *The American Heritage Dictionary (New College Edition)*, (American Heritage Publishing Co., 1980)
15. *The Random House Dictionary of the English Language*, (Random House, Inc., 1970)
16. Ebenezer C. Brewer, *Dictionary of Phrase and Fable*, (Cassel, 1970)
17. *World Book Encyclopedia*, (World Book Childcraft International Inc., 1979)